

「下野市の名前の由来」——なんで？しもつけ——

下野市教育委員会 文化課

平成一八（二〇〇六）年一月一〇日、下野市が誕生しました。それから少々時間が過ぎましたが、今でも時折、遠方の方からのお問い合わせで「しものし・したやし」などと読み違いをされることがあります。では、なぜ下野市なのか、ここでもう一度考えてみましょう。

皆さんご存知のように合併の時、新市の名前の由来に「当市には、三つの国指定史跡下野薬師寺・下野国分寺・尼寺跡があり、古代から下野国の中心部であった」と記されています。「下野国」栃木県・上野国「群馬県」というところまでは、多くの方がご存知かもしれないません。では、どのように上と下が決まったのでしょうか？当時の政治の中心地や都（藤原京・平城京）に近いところが「上」で、遠い方が「下」とされました。「上総」や「下総」も同様です。それでは、上下に二分される前の地名はというと「毛野国」でした。ですから、「下野国」となる前は「下毛野国」と記す時代がありました。藤原京からは、大宝三年（七〇三）のものとして推定される「下毛野国足利郡波自可里」（現・葉鹿町付近か）の木簡が出土しています。

最近の研究では、毛野国の範囲について、現在の群馬県と栃木県を単純にあわせた範囲が「毛野国」ではなく、北武蔵地域を含む新たな毛野地域圏が想定されています。

また、古代から近世まで「鬼怒川」は、毛野国の東端と常陸国の国境を流れているため「毛野河・衣（絹）川」と記されていました。

上下に分割された時期については幾つかの説がありますが、五世紀後半、六世紀初頭説が有力です。この頃は、摩利支天塚古墳や琵琶塚古墳が築造され、その後多くの古墳群が思川流域に形成される最初の時期と一致します。これは、旧来の毛野国の勢力ではなく、現下野市周辺に新たな新興勢力が出現したことを示しているのかもしれない。ちなみに「那須国造碑」で知られる旧湯津上村や那珂川町周辺は、毛野国の範囲ではなく「那須国」でした。

ではさらにいつ、「下毛野国」から「下野国」へと変わったのでしょうか？これは前回も記しましたが『続日本紀』和銅六年（七二二）の各国へ向けた『風土記』の提出指示にも関係します。記録提出の際、「国や郡・郷の名前によ字をつけよ」としています。その際

「毛」が削除され「下野」となりました。他の例では「三野国が美濃国」、「山背国が山城国」などがあります。この後、名前の付け替えや国の分割統合があり、最終的に国の数は六十六国、二島となり、「日本」という「国」の範囲がおおよそ決まりました。

では、「日本」（にほん・にっぽん）という国名が決まったのはいつかといえますと現在の研究では、持統三年（六八九）〜大宝元年（七〇一）の頃と考えられています。七〇二年に遣唐使の粟田真人が皇帝の則天武后に「日本」の使いであると述べた記録があります。この粟田真人はこの時、日本にもこのように優秀な人物がいるのかと褒められた人です。また、彼は下毛野古麻呂と一緒に「大宝律令」の編さん事業をした人でもあります。



写真は、下毛野の首長墓の一つと想定される甲塚古墳出土馬形埴輪

用語解説

- 上総国……千葉県中央部の旧国名、市原市など
- 下総国……千葉県北部、茨城県の一部、結城市は旧下総国
- 吉備国……岡山県、広島県東部の旧国名
- 美濃国……岐阜県南部の旧国名
- 山城国……京都府南部の旧国名